

定信紀行

第八話

兼六園のこと

寄稿 市文化財保護審議会委員

佐川 庄司

日本三名園のひとつである石川県金沢市に所在する名勝「兼六園」、その園名はこれまで長い間、松平定信が命名したものであるとされてきた。しかし、近年になって定信の日記（『花月日記』文政5年9月20日条）に「加賀の太守より額字をこふ、兼六園とて、たけ三尺に横九尺也」と記載されていることから、定信は加賀藩主前田斉広より兼六園の額字揮毫の依頼を受けてその額字を書いたのみであったということが明らかとなった。定信65歳の時であり、額の大きさは縦107センチ、横275センチとかなり大きなものである。



▲「兼六園扁額」松平定信筆（いしかわ生活工芸ミュージアム蔵）

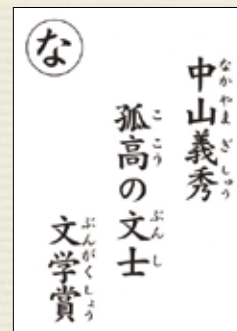
現在、定信揮毫による「兼六園」扁額は同園に隣接する生活工芸ミュージアムに展示されているが、かつては金沢城内から兼六園への入口である蓮池門に掲げられていた。いずれにしても、加賀前田家から兼六園の額字揮毫の依頼を受けるほど、当時の定信は著名な庭園家としても広く知られる存在であった。

◎観光課 ☎(28)5526

白河かるた

札でつながる今・昔

八枚目 「中山義秀」



「孤高の文士」と称される中山義秀（1900～1969）は、岩瀬郡大屋村（現在の大信地域）で生まれました。大学卒業後は中学校で英語教諭として勤務する傍ら執筆活動をしませんが、なかなか評価を得ることができず、退職や妻の病气、生活の貧窮などが重なり、不遇の時期を過ごしました。

文壇での地位を確固たるものにしました。当時の文学界を風靡していたプロレタリア文学やモダニズム文学の波に乗ることができなかった義秀ですが、両作品により独自の文学世界を創作するに至りました。義秀は作品の中で、人生の敗残者や、自己を生きるために偏屈者として憎悪されるような人間を好んで取り上げました。

時代は高度経済成長期。成功者がもてはやされ、敗残者や偏屈者が追いやられる世の中で、社会の軽薄な風潮に迎合することのない「反骨」の精神が、義秀の筆先に宿っていました。

◎まちづくり推進課 ☎(28)5533

お知らせ

ラウンジ

りぷらん

子育て情報

保健情報

くらしの
情報館

定信紀行

白河かるた

休日当番医・
無料相談ほか

市長の
手控え帖